

中英語詩「ユダ」のバラッド性

桜井雅人

1 序

中英語の詩にイスカリオテのユダ (Judas Iscariot) を扱った作品がある。そのマニユスクリプトはケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに所蔵されており、時代は1300年頃のものと考えられている⁽¹⁾。マニユスクリプトにタイトルは付されていないが、一般に「ユダ」(Judas)として知られている。イングランド南西部方言⁽²⁾で書かれた物語詩で、その当時のものとしては内容・形式ともにいくつかの特異な点が認められるが、後の時代に記録されたバラッドと共通するスタイルを有していることから、ふつうは「現存する」最古のバラッドとみなされている。しかし、他のバラッドに比べて著しく古いものであるし、このマニユスクリプト以外に異版 (version) が見当たらないことから、その伝承性もつまびらかではない。そこで、本稿ではこの詩の伝承バラッド的特徴と非伝承バラッド的特徴とを内容・形式の両面から考察してみる。

この詩はバラッド選集でも収録していないものが多い⁽³⁾ので、まずここで全文を挙げておこう。ただし、編者によって様々な校訂が行われており、スタンザ区分・綴り・改行・語句の挿入・解説などに相違があるので、もっともマニユスクリプトに近いと思われる形で示しておく（なお、末尾の行数を示す数字は参照のために付け加えたものである）。出典はフランシス・ジェームズ・チャイルド編『イングランドとスコットランドの民間伝承バラッド集成』によっているが、本文（第1巻）ではなく「追加と訂正」（第5巻）に示された⁽⁴⁾ものであり、1個所のみケネス・サイサムに従って訂正しておいた⁽⁵⁾。

Hit wes upon a scereporsday pat vre louerd aros.

ful milde were þe wordes he spec to iudas.

iudas þou most to iurselem oure mete for to bugge.
 þritti platen of seluer þou bere up oþi rugge,
 þou comest fer iþe brode stret fer iþe brode strete. 5
 summe of þine cunesmen þer þou meist i mete.
 imette wid is soster þe swikele wimon.
 iudas þou were wrþe me stende the wid ston. .ii.
 for the false prophete þat tou bileuest upon.
 Be stille leue soster þin herte þe to breke. 10
 wiste min louerd *cr̄ist* ful wel he wolde be wreke.
 Iudas go þou on þe roc heie up on þe ston.
 lei þin heued i my barm slep þou þe anon.
 Sone so iudas of slepe was awake.
 þritti platen of seluer from hym weren itake. 15
 He drou hym selue bi þe cop þat al it lauede ablode.
 þe iewes out of iurselem awenden he were wode.
 Foret hym com þe riche ieu þat heiste pilatus.
 wolte sulle þi louerd þat hette iesus.
 I nul sulle my louerd for nones *cunnes* eiste. 20
 bote hit be for þe þritti platen. þat he me bi taiste.
 Wolte sulle þi lord *cr̄ist* for enes *cunnes* golde.
 Nay bote hit be for þe platen. þat he habben wolde.
 In him com ur lord gon as is postles seten at mete.
 Wou sitte ye postles *ant* wi nule ye ete. .ii. 25
 ic am iboust *ant* isold to day for oure mete.
 Vp stod him iudas lord am i þat
 I nas *neuer* oþe stude þer me þe euel spec.
 Vp him stod peter *ant* spec wid al is miste.
 þau pilatus him come wid ten hundred cnistes. .ii. 30
 yet ic wolde louerd for þi loue fiste.
 Still þou be peter. wel i þe i cnowe.
 þou wolt fur sake me þrien. ar þe coc him crowe. 33

ある聖木曜日に、イエスは起床された。

ユダに話しかけられた言葉はとても優しくかった。

「ユダよ、私達の食物を買いにエルサレムへ行きなさい。

銀貨 30 枚を背負っていきなさい。

はるか遠くで広い道、はるか遠くで広い道に出るだろう。

そこでお前の縁者の幾たりかに出会うかもしれぬ。」

ユダは妹に会った。二心ある女だった。

「みんながあなたに石を投げつけるのはもっともなことね。

いんちき預言者の言うことを信用するからよ。」

「だまりなさい。良心の呵責にさいなまれるとよいのに。

我が主キリストが知り給えば、きっと仕返しをするところだぞ。」

「ユダ、あの岩の上へ、あの石の上の高いところへ行きなさい。

私の膝を枕にして、すぐに眠りなさい。」

ユダが眠りから目を覚ますと、

銀貨 30 枚はすでに盗まれていた。

髪を引きむしり、頭は朱に染まった。

エルサレムから来たユダヤ人たちには、ユダは気がふれたのだと思えた。

そこへ現われたのは金持のユダヤ人で、名をピラトといった。

「お前の主人を売ってはくれぬか、イエスという名の者を。」

「いかなる物とも引き替えるつもりはありません。

主が私に託した銀貨 30 枚なら話は別ですが。」

「お前の主人キリストを売ってはくれぬか。いかなる種類の金貨でもよいぞ。」

「いいえ、主の持物たる銀貨 30 枚なら話は別ですが。」

使徒たちが食卓についているところへ、主がやってこられた。

「使徒たちよ、席についているのに食事をしないのはなぜか。

今日、私はお前たちの食物と引き替えに売られ買われたのだ。」

ユダは立ち上がって言った。「私とその者だと言われるのですか。

あなたの悪口が聞かれる所なぞには足を踏み入れたことはありません。」

ペテロが立ち上がって、せいっぱいの声をはりあげた。

「ピラトが 1000 人の兵士を引きつれてきたとしても、

主よ、あなたのために戦うでしょう。」

「だまりなさい、ペテロよ、お前のことはよく知っている。

鶏が鳴く前に、お前は三たび私を見捨てることになるのだ。」

2 内容の伝承性について

『新約聖書』に登場するイスカリオテのユダを詩にしたものではあるが、「ユダ」はその内容をそのまま詩にしたものではない。特に大きな相違は裏切りの動機をかなり具体的に付け加えていることにある。『聖書』においては、その動機についてほとんど何も語られていない。しいて暗示する個所を捜すとするならば、ベタニヤでひとりの女がイエスに高価な香油を注いだことに対して弟子たちは憤り、イエスはそれを諭すこと（「マタイ」26：6～13、「マルコ」14：3～9）、ユダが祭司長（ただし、この詩ではピラトが取引の相手）に「彼をあなたがたに引き渡せば、いくらくださいますか。」と言って金額の相談をすること（「マタイ」26：15）、それにユダにサタンがはいったこと（「ルカ」22：3）くらいしかない。そこから想像できることは、ユダはイエスの行為に不満を持っており、金に目が眩んでイエスを売り渡した、という理由であり、ユダに対して情状酌量はありえないようだ。

このようなユダの反英雄 (anti-hero) ないしは反聖人 (anti-saint) としての性格づけはかなり一般的であり、Judas は普通名詞となって「裏切り者」の意を示す。『聖書』はもちろんイエスが中心となっているから、ユダはあくまでイエスに対して配された人物像なのである。ユダが主人公になってはならない。ここで、ロード・ラグランの『英雄論』を少しながめてみよう⁽⁶⁾。ラグランによれば伝承上の英雄には一定の型 (pattern) があり、それは22の項目から成っている。その型は次の通りである。

1. 英雄の母は王族の処女である。
2. 父は王である。また、
3. 母の近い親戚である。しかし、
4. 英雄を身ごもった情況は尋常なものではない。
5. また、彼は神の子とされている。
6. 出生の際に、たいいていは父ないしは母方の祖父によって殺害の企てがある。しかし、
7. 彼は誰かにさらわれる。そして、
8. 遠くの国で養父母に育てられる。
9. 子供のころのことはまったく不詳である。しかし、

10. 成年になるとすぐに自分の未来の王国へ帰還する。またはそこへ出かける。
11. 王または巨人ないしはその両者、あるいは竜、野獣に打ち勝つ。
12. 王女と結婚する。彼女はたいてい先王の娘である。
13. 王になる。
14. しばらくの間、平穩に国を治める。
15. 法律を規定する。しかし、
16. 後に、神々の恩寵を失う。または臣民の支持を失う。あるいはその両方を失う。
そして、
17. 王位および国から追放される。その後、
18. 謎の死をとげる。
19. その場所は丘の上であることが多い。
20. 子供たちがもし残された場合であるが、王位を継がない。
21. 遺骸は埋葬されない。それにもかかわらず、
22. 一つないし複数の聖墓がある。

ラグランは、この型をオイディプス、モーセ、アーサー王などにあてはめてかなりの項目が該当することを論じ、アレクサンドロス大王を除いて6項目以上を充たす歴史上の英雄は存在しない⁽⁷⁾、と言う。イエス・キリストはここでは論じられていないが、その生涯はかなりの部分で神話上の英雄と共通している⁽⁸⁾。上記の型で問題となるのは18の「謎の死」であるが、具体例としては「崖から突き落とされる、後継者に殺される、雷に打たれる、姿を消す、陰謀によって殺される」などがあげられている。このような観点からすると、ユダに裏切られたということが重要なのであって、ユダの動機がいかなるものであっても大した問題にはならないし、また「謎めいている」ほうが神話上の英雄らしくなる⁽⁹⁾。

しかし、視点をユダに向けると動機は重要になってくる。そもそもユダとはいかなる人物なのか、どのような経歴なのか、などの疑問が生じてくるのは避けられない。ユダの生涯に関する伝説はすでに12世紀にはラテン語でまとめられ、中世末期にはヨーロッパ全土に広まって民衆の間に伝えられたものと思われる。内容はそれぞれ異同があるが典型的な伝説は次のようなものである⁽¹⁰⁾。

ユダはエルサレムに住むユダヤ人の息子として生まれた。父の名はルベン (Reuben)、母の名はキボレア (Cyborea) といった。ある夜、キボレアは夢を見た。その夢によると、彼女は身ごもり、その子はユダヤ民族全体の破滅のもととなる運命と

のことであった。大いに心配して夢のことをルベンに話したが、そのようなものは悪霊がもたらしたものだから気にしないように、と答えた。だが、そのうちに時が来て、男の子が生まれた。夢の記憶がよみがえり、もしかして正夢となることを恐れ、幼きユダは小さなたんす箱に入れられて海に流された。風と波とがイスカリオテの島に運んだ。彼の名はこの島の名から来ている。その島の王妃には子供がなく、若い王子が後を継ぐことを望んでいたところだったが、見目うるわしい赤ん坊を見つけたのだ。国中に身ごもったことを知らせ、自分の子と宣言できるまで秘かに育てさせた。このようにして、ユダは王国の後継ぎとして王族の流儀で養育された。しかし、ほどなく王妃と王との間に男の子が生まれた。二人の子供はいっしょに育てられたが、じきにユダの性格の奥にある邪悪な心が表にあらわれ始め、弟とされていた子をなぐったり悪態をついたりすることがしばしばあった。王妃の忠告も聞き入れずに本物の王子を虐待しつづけたので、王妃はとうとう怒りにまかせてユダの出生の秘密を話してしまった。これを知って腹をたてたユダは機会を見つけ次第に弟を殺害し、成り行きを恐れて船に乗ってエルサレムへ逃げた。そこでは彼の優雅な立居振舞と邪悪な本能によってピラトの従者に加えられた。ある日のことピラトは隣人の庭をのぞき込んで、そこに見えた果物を欲しいという押えがたい気持ちにかられた。そしてユダはそれを手に入れることに応じた。さて、ユダは知らなかったのだが、庭と果物とは本当の父親ルベンのものだった。この果物を取り終らぬうちにルベンが現われた。激しい言い争いが起こり、なぐり合いになった。そしてとうとうルベンは殺されてしまった。この殺人事件の目撃者はいなかったので、ルベンは急死したものとされた。それから、ピラトと共謀してユダは寡婦となったキボレアと結婚し邸宅と財産も手に入れた。花嫁はひどく悲しげな様子でしばしばため息をついた。ある日のこと夫のユダに悲しみの原因を尋ねられ、彼女は身の上話を長々と語って聞かせたので、ユダは父親殺しと近親相姦という二重の罪を犯したことをさとった。二人はひどく後悔の念にかられたが、キボレアのすすめでユダはイエスのもとに行き罪の許しを乞うことにした。じきにお気に入りの弟子となり、十二人の弟子たちの頭とされた。しかし、彼の邪悪な性分がまたもや現われ、銀貨30枚のために主人を裏切ってユダヤ人たちに引き渡した。その後、また後悔して、金を返したあと首をつって死んだ。

このオイディプス風の伝説は先ほどのロード・ラグランの定型にも部分的に一致するものであり、そのことも興味深いのであるが、ここではユダの裏切りは誕生の時か

ら運命づけられたものであったことに注目しておこう。つまり、ユダは本性が邪悪であった、という解釈である。この伝説はイングランドにも伝えられた。そして、14世紀初頭（これは「ユダ」の年代とほぼ一致する）の『南イングランド聖人伝説集』の末尾にピラトの話と並んで付け加えられている⁽¹¹⁾。

さて、問題の詩「ユダ」に話を戻してみよう。すでに明らかなように、上記の伝説とは内容的に異なっているものであり、直接の影響関係はなさそうである。裏切りの直接の原因はユダの本性ではなくて、「妹」(soster=sister⁽¹²⁾)にだまされて主から託された金を盗まれてしまったために穴埋めとして銀貨30枚でイエスを売った、とされている。ここで言う「妹」は実際には「愛人」(mistress)のことである⁽¹³⁾とするならば、だまされて岩の上につれていかれて膝枕で眠りこけたという話の筋がより鮮明になってくる。ただ問題があるとするとするなら、イエスが「縁者の幾たりかに出会う」とした予言の重みが薄れることである⁽¹⁴⁾。ともかくも、ここでもっとも重要なのは「妹」の登場であり、この詩の内容でもっとも特異な点となっている。ユダを主人公とするのみならず、それに対する人物として「妹」を配置することにより、ユダは一気に人間味のある姿を現わす。もともと気の弱い、むしろ「善人」とも言える人物が、ちょっとした油断によって大切な金を盗まれてしまい、主人の叱責を恐れるがあまりに、最大の罪を犯すに至ったのであり、イエスを売り渡したこともユダが意図的にしたことではなく、困りはてていたところにちょうどよくピラトが近づいて付け込んだのである。イエスは慈悲深いというよりは「仕返し」をする人物に描かれており、そうするとはじめに「とても優しい」言葉をかけたのはユダをためすためであったのであろうか。また、ユダは盗まれた額のみを求めており、それ以上でもそれ以下でも取り引きに応じない。決して強欲ではないのである。ユダは悪人というよりは情況の犠牲者であり、真の悪人は「妹」であるという構成になっている。

物語構成からすると、もう一点、話の結末に問題がある。ユダの裏切りが主題であるのなら、なぜペテロに話に移り、そこで急に終わっているのだろうか。『聖書』には、ユダがイエスに接吻すること（「ルカ」22：47～48）、および裏切りを後悔し祭司長に金を返したあと首をつって死んだこと（「マタイ」27：3～5）が書かれている（ただし、「使徒行伝」1：16～19参照）。上記の伝説もユダの死で終わっている。このことからすると、「ユダ」にはもともと死に至るまで話が続いていたのであり、途中で打ち切られたためにペテロで終わってしまった、とも考えられる⁽¹⁵⁾。

「ユダ」の物語はきわめて特異であるので比較できる類似の話がほとんど残っていない。比べうるものとしては、すでにチャイルドが「ユダ」の解説の中で紹介してい

るウェンデ語 (Wendish) のバラッドがあるのみである⁽¹⁶⁾。

イエスと弟子たちは貧しい寡婦を訪れてもてなしを乞う。しかし、宿を貸してもよいがパンはありません、と女が言う。そこでイエスは銀貨 30 枚でパンを買いに行く者を募ると、ユダが申し出て使いに出かける。ユダヤ人街に行くと、仲間のユダヤ人たちがとばくをしていてユダをさそう。はじめの 2 回は勝つが、3 回目に有り金をとられてしまう。彼らは「どうして悲しげな顔をするのか。お前の主人を銀貨 30 枚で売ったらどうか。」と言う。さて、その後、イエスは弟子たちに「私を売った者はだれか。」と尋ねる。ヨハネとペテロとユダは次々に「私はその者と言われますか。」と答えるが、ユダに向かってイエスは言う。「偽りの者よ、お前がいけばよく知っているはずだ。」ユダは後悔して、首をくくろうとして走りかける。主は「戻りなさい。お前の罪は許されるぞ。」と言うが、ユダは走り去る。まずモミの木に「柔らかな木よ、私の重みに耐えられまい。」と言う。それからポプラ⁽¹⁷⁾の木に「堅い木よ、私の重みに耐えられるだろう。」と言う。そこでユダはポプラの木で首をくくって死んだ。ポプラの木が今でも揺れ震えているのは、さばきの目を恐れているからである。

末尾の発生原因的 (etiological) 説明は民間説話でしばしば見られるものであり、3 回勝負すること、イエスに 3 人が答えること、2 種の木に順番に尋ねること、なども口承文芸の特徴を示していると言えよう。この 2 つの「バラッド」の間には「何らかの間接的ないしは遠い関係を想定するほうが合理的であるように思われる。⁽¹⁸⁾」とポール・フランクリン・ボームは述べている。たしかに、類似点は多い。しかし、それは題材の一部と物語の全般的構成が似ているのであって、語り口には大きな違いがある。原料が同じであっても味つけは違うのである。バラッドはまさにその味つけの手法を問題にしてきたのだから、たとえ内容に関係があると認められたとしても、ただちに「ユダ」を民衆文学とするわけにはいかない。また、「ユダ」の物語の枠が基本的には「マタイ」と「マルコ」であることが認められる⁽¹⁹⁾以上、遠い過去に共通の伝説を想定するのは困難であるし、ウェンデ語との地理的・文化的距離も遠すぎる。少なくとも、現在の資料でみる限り、「ユダ」はイングランドで成立したものと考えられる。しかも、バラッドとしての「ユダ」となると、ほぼ確実にイングランド生まれであると言える (もちろん「ユダ」がバラッドであると認めた場合のことであるが)。

内容的な問題に関連して宗教的な題材を扱ったバラッドを考えておこう。いわゆる

宗教バラッド (religious ballad) はそれほど多くない。「チャイルド・バラッド」でいうと、21～24 番および 54～56 番がこれに当たり、「ユダ」は第 23 番に分類されている。それ以外には、キャロル・バラッドとも呼ばれる「ひどい柳」(The Bitter Withy) や「彼方に庭園が」(Over Yonder's a Park) などがあり、これらの「非チャイルド系バラッド」を加えてみても、やはり数は少ない。伝承バラッドにおいて宗教バラッドは中心を占めていないようである。たしかに、「チェリー・トリー・キャロル」(The Cherry-Tree Carol) においては、ヨセフはマリアの懐妊を他の男と通じたためと思っているし、「ひどい柳」においては、幼少のイエスは同じ年頃の子供たちから仲間はずれにされたために仕返しをして彼らを殺してしまう、などと登場人物がきわめて民衆的な意識や感情を持っているものとして描かれている。この点からすると、「ユダ」の人間味も伝承文学的特質を示すと言えるかもしれない。しかし、「チェリー・トリー・キャロル」や「ひどい柳」に見られる豊かな想像力と一つのエピソードに焦点をしばっていき手法に比べると、「ユダ」は『聖書』にはない物語要素を付け加えていながら十分に完成されていないという印象を受ける。「ユダ」を伝承バラッドの先駆とみるならば十分に伝承バラッドになりきっていないのである。このような印象が正しいとするならば、「ユダ」が後世まで伝承されなかったこともうなづけよう。ただし、ここで「ユダ」の文芸的価値が低いと言っているのではなく、あくまで伝承的価値を論じているのである。

3 表現とスタイル

「ユダ」はたして伝承バラッドであったのであろうか。このことは、内容と形式の両方から見なくてはならない。伝承のプロセスは異版 (version) が存在しない以上、推測するほかはないのだが、少なくともそれほど民衆に親しまれたバラッドではなかった、と言うことはできる。作者不詳であることは当時の作品としてはふつうのことであり、このことは何も証明していない。伝承バラッドであるとされる大きな理由は「劇的すばやい話の運び、突然の変転、抑制された表現⁽²⁰⁾」であり、これが後世のバラッドと共通していることによる。それに加えて、バラッドの最大の権威とみなされているチャイルドが『バラッド集成』に含めていることが、大いにあざかっていられると思われる。

しかし、チャイルドは最後まで自信を持っていたのではなかった。『イングランドとスコットランドの民間伝承バラッド集成』を編集している過程でデンマークのバラ

ッド学者グントヴィック (Gruntvig) に写しを送って意見を求めたりしている⁽²¹⁾が、結局のところ「これまでのところバラッドであることは認められていない⁽²²⁾」との注記を添えて『集成』に載せたのである。境界線上にあるものをひとまず含めておくという編集態度はブロードサイド版の扱いなどにも見られ、伝承バラッドの可能性があるから「それとなく」収録しておいたようにも思える。つまり、最終的な結論は保留した形になっている。

これに対して、チャイルドの注記にまともに答えず、本物のバラッドであるという主張がなされている。そしてそれらはほとんどすべてスタイルに基づいた判断なのである。たとえばアラン・ポールドは、長い説明を加えずに、事件の核心に入り (in medias res)、すばやくしかも要点をついて、重要でない細部を述べず、しかも対話に基づいている、という特徴をあげて、「生き生きと、非個人的で (impersonal)⁽²³⁾演劇的で、リズムも素朴である」ことにより本物の (genuine) バラッドであると言う⁽²⁴⁾。また、M. J. C. ホジャートは、もしかすると聖職者が書いたものかもしれないが、ある種の演劇的で文体上の特徴があるというだけで本物のバラッドとみなすべきだ、と結論づける⁽²⁵⁾。「本物の」とはどういう意味であろうか。非伝承バラッドも含めているのなら、つまりバラッドを伝承と非伝承に分けずにその形式を持つもっとも古いものとするならば、「本物の」とは「完全なバラッド形式の」という意になるが、そうではなくて「伝承の、民衆が作った」などの意を持たせる⁽²⁶⁾のであれば、あまりにも独断的な結論であると言わざるをえない。よく知られているように、非口承文芸としてのバラッドはたくさん書かれているし、それらはたいいてい伝承バラッドやブロードサイドバラッドを模倣しているだけに、上記の特徴にあてはまるのである。さらに、ポールドの説明は他のバラッドの特徴を強引に「ユダ」にあてはめている。事件の核心にすぐに入っているのではないし、ペテロに関する部分は「重要でない細部」かもしれない。そもそも「本物の」という表現は「バラッドではない」という主張に対抗して用いられるべきであり、その主張は伝承性を問題にしているのである。

「ユダ」がバラッドであるならば歌に特有の詩型を持っているはずである。つまり、その歌詞で歌えなくてはならない。ところが、「ユダ」は多くのバラッドに見られるバラッド律 (ballad meter) ではない。ホジャートは「その奇妙なミーターを分析するのは困難である。⁽²⁷⁾」と言っている。しかし、これに対して、ジョージ・スチュアートによれば、多くのバラッドが「第2強勢の第2音節の欠落という点を除けば七詩脚 (septenarius)」となるのであり、「ユダ」もこれに含まれる⁽²⁸⁾。さらに三井徹は、歌ということを考慮すれば三拍子韻律 (triple meter) の解釈ができるし、行末に付

された“.ii.”という記号(=bis)は、通例考えられているような歌詞の繰り返しではなく、同じ旋律を次の行も用いるという意味である、と言う⁽²⁹⁾。ただし、詩型から判断できることは、「歌える」ということであり、そこからただちに「伝承バラッド」とするには無理がある。

「ユダ」のバラッド的特質は一見しても明らかであるが、それならば非バラッド的特質はどうであろうか。たとえば、リフレイン(refrain)の欠如が考えられる。もちろん現在まで伝承されているバラッドでリフレインを欠くものが多いし、記録されない場合もあるから基準にはならない。しかし、詩型とスタンザ区分から見て、おそらくリフレインはなかったものと推定できよう。次に、漸層的繰り返し(incremental repetition)であるが、これも発達するのはもっと後の時代のことであるから、ここで用いられていないことは驚くにあたらない。ただし、先ほどもふれた“.ii.”を行の繰り返しとするならば、まったく繰り返しが無いとは言えないのであるが、スタンザを超えたものと解するのは内容的にも不自然であり、歌としてみるとその個所だけ「尻取り歌」のようになってしまう。

残された問題は、同種の表現が異なった文句になっていることと、類型的表現がほとんど見当たらないことである。たとえば、

Be stille leue soster....(l. 10)

Still þou be peter....(l. 32)

は、バラッドであるとするならば、同じ旋律で歌われたはずであるから、ふつうならばこのように相違しないであろう。口承文芸においては、相違は特別の情報を与えるときに用いるのであり、そのために他の個所は同一にしておくのである。漸層的繰り返しも同じ枠組を用いることによって相違部分をきわだたせるという効果を持つ。この他にも、

Vp stod him iudas....(l. 27)

Vp him stod peter:...(l. 29)

bote hit be for þe þritti platen. þat he me bi taiste. (l. 21)

Nay bote hit be for þe platen. þat he habben wolde. (l. 23)

wolte sulle þi louerd....(l. 19)

Wolte sulle þi lord crist....(l. 22)

において相違が見られる。さらに、ピラトとユダの問答においても、同じ語句が用いられてもよいところであるし、類型的な修飾語句も使われていない。ここにはいわゆるバラッド語法がほとんど見られないのである。

以上のことから、「ユダ」は少なくとも口承バラッドをそのまま記録したものではない、と言える。古英語の詩とどのように繋がるのかは不明であるが、その口承詩としての特質も引き継いでいない。そうすると、「ユダ」は、(1) 伝承バラッドを作り変えたもの、(2) 伝承バラッドを模倣したもの、(3) 新しい手法で書かれたもの、のいずれかとなろう。そして、(1) の場合であるとしても、いわゆるバラッド的表現方法は基本的なスタイルのみであり、十分には発達していなかったと思われる。

4 バラッドの歴史について

これまでバラッドはあまり歴史的に扱われてこなかった。どちらかと言うと、「バラッドに年代記は存在しない⁽³⁰⁾」という立場が一般的であり、ひとたびバラッドとされたなら、時代も地域も区別せずに平面的に並べられ、その特徴を論じるのがふつうであった。しばしばバラッドは中世末期に盛んであったとされるが、その特徴を論じるときには18世紀以降のものを例に出すこともめずらしくはない。ほとんど唯一の例ともいえる中世バラッドであるはずの「ユダ」は、分析や批評の対象とされるのはまれであり、単に題名が引き合いに出されて、中世にすでにバラッドが存在した証拠として使われてきた。

しかし、すでに見てきたように、「ユダ」は十分に「バラッド的」ではないのである。それだからこそ、分析や批評の対象とはされてこなかった。しかも、伝承性も明らかではないとするならば、イギリスのバラッドは15世紀ごろから始まるとしたほうが安全である。もちろんバラッドは突如として成立したものではあるまい。だんだんと発達していったと想定されよう。「ユダ」はその過渡期にある形を残しているのかもしれない。バラッドは様々な要素を総合して成立したものであるから、それぞれの要素は他の文芸にも共通していると思われる。物語性だけを考えるとバラッドの歴史は書けないのである。「ユダ」が重要な作品であるのは、バラッドの境界線に近いところにあるからで単に時代が古いからだけではない。

注

1. Kenneth Sisam, ed., *Fourteenth Century Verse & Prose* (Oxford, 1921), p. 168. これに対して、年代について疑問も出されており、80~100年前の研究だから信頼性に欠ける、とする意見もある (Lajos Vargyas, *Researches into the Mediaeval History of Folk Ballad*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1967, p. 275)。なお、Peter Dronke, "Learned Lyric and Popular Ballad in the Early Middle Ages," *Studi Medievali*, Serie Terza, Vol. 17 (1976), p. 37 参照。
2. Fernand Mossé, *A Handbook of Middle English*, trans. by J. A. Walker, (Johns Hopkins Pr., 1972), p. 371.
3. 概して言うと、一般的選集にはなくて、学術的選集に含まれる。
4. Francis James Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, Vol. 5 (1894-98; rpt. Dover, 1965), p. 288.
5. 6行目の tunesmen (=townsmen) を cunesmen (=kinsmen) とした。理由は、Sisam, op. cit., p. 257 参照。また、27行目の末尾は欠けたままにしておいたが、freak (=man) を補うことが多い。
6. Lord Raglan, *The Hero: A Study in Tradition, Myth, and Drama* (1936; Greenwood Pr., 1975), pp. 173-185. なお、Alan Dundes, ed., *The Study of Folklore* (Prentice-Hall, 1965), pp. 142-144 参照。
7. Raglan, op. cit., pp. 184-185.
8. Alan Dundes, "The Hero Pattern and the Life of Jesus," in *Interpreting Folklore* (Indiana U. P., 1980), pp. 223-261.
9. アメリカの Jesse James の場合は裏切りによって殺されたことが特に強調され、そのバラッドには裏切りの理由は示されない。
10. Paul Franklin Baum, "The Mediaeval Legend of Judas Iscariot," *PMLA*, Vol. 31 (1916), pp. 482-483.
11. Charlotte D'Evclyn and Anna J. Mill, eds., *The South English Legendary*, EETS, o. s. 236 (Oxford U. P., 1956), Vol. II, pp. 522-604.
12. 「姉」かもしれない。
13. この解釈は、Peter Dronke, *The Medieval Lyric* (Hutchinson U. L., 1968; 2nd ed., 1978), p. 68 によるもので、Donald G. Schueler, "The Middle English *Judas*: An Interpretation," *PMLA*, Vol. 91 (1976), p. 844 n でも、Mary-Ann Stouck, "A Reading of the Middle English *Judas*," *Journal of English and Germanic Philology*, Vol. 80, No. 2 (1982), pp. 188-189 でも受け入れられている。
14. Schueler, op. cit., p. 844 n. なお、注5に示した tunesmen のほうが内容的には都合がよい。
15. E. K. Chambers, *English Literature at the Close of the Middle Ages* (Oxford, 1945), p. 153.
16. F. J. Child, op. cit., Vol. I, pp. 242-243. なお、Paul Franklin Baum, "The English Ballad of Judas Iscariot," *PMLA*, Vol. 31 (1916), p. 183 も参照した。

17. イギリスではふつうニワトコ (elder) とされている (Thiselton Dyer, *Folk-Lore of Shakespeare*, 1883; rpt. Dover, 1966, p. 204)。なお, Judas tree (セイヨウハナズオウ) も, ユダが首をつったという伝説から名づけられたものである。
18. Baum, "The English Ballad of Judas Iscariot," p. 185.
19. Stouck, op. cit., p. 191.
20. Sisam, op. cit., p. 162.
21. Sigurd Bernhard Hustvedt, *Ballad Books and Ballad Men* (1930; rpt, Johnson, 1970), p. 294.
22. Child, Vol. I, p. 242.
23. 「語り手の主観などを加えずに」の意で, しばしばバラッドの特徴とされる。
24. Alan Bold, *The Ballad* (Methuen, 1979), pp. 26-27.
25. M. J. C. Hodgart, *The Ballads* (Hutchinson, 1950; 2nd ed., 1962), pp. 70-71.
26. Walter Wiora が die *echte Volkslied* と言うのは, そのような意味合いである。秋山竜英編『民謡研究リーディングス』(音楽之友社, 1983), pp. 43-53; W. Wiora, *European Folk Song* (Arno Volk Verlag, 1966), p. 6 参照。
27. Hodgart, op. cit., p. 61.
28. George R. Stewart, Jr., "The Meter of Popular Ballad," rpt. in *The Critics and the Ballad*, ed. by M. Leach and T. P. Coffin (Southern Illinois U. P., 1961), p. 166, p. 276 n.
29. Tōru Mitsui, "Notes on the Stanzaic Division and the Metre of 'Judas,'" 『英文学研究』Vol. 44, No. 2 (1968), pp. 209-220. ただし, このスタンザ区分については, A. Quiller-Couch, ed., *The Oxford Book of Ballads* (1910) がすでに試みている (なぜか第5スタンザまでしか示されていないが)。
30. Quiller-Couch, op. cit., p. viii.